

—編集後記—

124号から135号までの4年間、編集委員長を務めさせて頂きました。任期期間中、編集委員、査読頂いた皆様、その他多くの方々にご協力頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

今号はシンポジウム特集として「福島放射性物質汚染の現状と課題」を取り上げました。シンポジウム特集としては、126号の「放射性物質問題 — 土壌物理に求められること —」に続く2回目の放射性物質汚染特集となります。東日本大震災から6年の歳月が経ち、日常生活では福島の問題は忘れられがちになっています。しかし、原発事故以来測定されてきたデータを見ると、この災害の記録と解析の継続は、我々研究者の責任なのだと改めて痛感させられました。放射線量の減衰データは、半減期30年の理論に良く合致しており、我々の子供や孫の世代まで引き継がれる問題であることも再確認されます。一方、データをよく見ると、土粒子に強く吸着されて動かないセシウムだけではなく、有機物に吸着した後分解されて、コロイド粒子と一緒に動く形態などの詳細も明らかになってきます。今号に掲載されているデータは、出来るだけ多くの皆さんに、科学的な視点で考えて頂きたいと思います。貴重なデータを整理して提供頂いた講演者の皆様、ありがとうございました。

4年間の任期の間に、原稿の電子化とWeb掲載の環境

を整えることが出来ました。溝口前会長のご尽力もあり、様々な機能を持った最新の環境が整えられています。土壌物理学会のみならず中・小規模の学会は、会員数、投稿原稿の減少が共通の悩みです。近い将来、土壌の物理性も完全電子ジャーナルへの移行が必要となることも予想されますが、その準備はほぼ出来ています。また、実験や計算結果の動画、測定データ、HYDRUSのプロジェクトなどを論文と一緒にダウンロードすることができます。こうした論文の付加価値を高める機能は、議論や情報交換を行いやすい環境を与えます。質の良い情報の発信を続けることにより、今まで以上に他分野の方々からも注目される土壌の物理性になることを確信しています。もちろん今後の発展のためには、会員の皆さんの協力は不可欠ですので、是非、土壌の物理性に投稿頂き、情報を世界に向けて発信して下さい。よろしく願います。

最後に、私は、土壌の物理性の任期とほぼ同じく、2004年1月から務めてきたVadoze Zone Journal (VZJ)の編集委員を2016年末に退任しました。これからも、土壌の物理性やVZJに論文を投稿する立場で積極的に関わっていきたいと思いますので、今後ともよろしく願います。

取出伸夫（編集委員長）

土壌物理学会

事務局構成	会 長	長 裕幸	(佐賀大学)	
	副 会 長	江口 定夫	(農研機構 農業環境変動研究センター)	
	庶務幹事	中野 恵子	(農研機構 九州沖縄農業研究センター)	
		宮本 英揮	(佐賀大学)	
	編集幹事	渡辺 晋生	(三重大学)	
	会計幹事	近藤 文義	(佐賀大学)	
	会計監査	中川 啓	(長崎大学)	
	編集委員会	委 員 長	徳本 家康	(佐賀大学)
		委 員	取出 伸夫	(三重大学)
			小杉 賢一朗	(京都大学)
		千葉 克己	(宮城大学)	
		釣田 竜也	(森林総合研究所)	
		中川 啓	(長崎大学)	
		中辻 敏朗	((地独) 北海道立総合研究機構)	
		橋本 洋平	(東京農工大学)	
		諸泉 利嗣	(岡山大学)	
		宮本 輝仁	(農研機構 農村工学研究部門)	
	望月 秀俊	(農研機構 西日本農業研究センター)		
	吉田 修一郎	(東京大学)		